

国語

時間
60分

「注意」

- 1、放送で指示があるまで、この冊子さつしを開いてはいけません。
- 2、この冊子は27ページまであります。ページが足りなかったり、順序がおかしかったり、また印刷が不鮮明ふせんめいで読めない部分があったりした場合には、手をあげて監督かんとくの先生に申し出なさい。
- 3、問題についての質問は一切受け付けません。
- 4、下書きにはこの冊子の下書き欄らんや余白を使いなさい。
- 5、字数指定のある問題では、句読点やカッコなども字数に含みます。

聖光学院中学校



一、次の①～⑤の文の――線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

① 客席に目をテンじると、かれがこちらを見つめていた。

② ちようい弔意を示すために、ハンキをかかげる。

③ 制作に五年かけただけあつて、シユツシヨクのできばえだ。

④ 彼のトウイ即てくみよう妙な受け答えは、周囲の人をおどろかせた。

⑤ 落ち込んでいる彼にハッパをかけた。

二、次の①～⑤の文の~~~~線部は、() 内の意味を表す言葉です。例にならって、□□にあてはまる言葉をひらがな二文字でそれぞれ答えなさい。

例
難しい課題でも、 <u>かれ</u> は□□を投げることなく取り組んだ。(あきらめて手を引く) ↓〈答〉さじ

① 最近は□□もしやくし杓子も海外旅行に行きたがる。(だれもかれも)

② 今のは反則だと□□巻く彼をなだめた。(強い口調で言い立てる)

③ お小遣いをあげようにも、無い□□は振れない。(持っていないものはどうしようもない)

④ 夜更かしは体に□□る。(悪い影響を及ぼす)

⑤ 山あいの□□びた温泉旅館で一泊した。(いかにも田舎という感じのする)

三、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「なんだよアンタ、勝手に厨房に入ってんじゃねえよ！」

「言っている意味が分からないわ。料理長が厨房に入らないで、どうやって仕事をするの」

「だから、認めてねえって言ってんだよ！」

約束の営業二時間前に出勤してみると、早くも中園と智子が厨房でやり合っていた。甘くて香ばしい香りが漂っているのは、智子がチキンライスを炒めているからだ。

見とれるほど手際がよく、米の一粒一粒にケチャップがまんべんなく絡んでゆく。そういえば掃除機がけを優先したせいで、朝ご飯を食べそびれた。鳴りそうになるお腹を押さえつつ、カウンター越しに声をかける。

「おはようございます。なにをしているんですか」

朝一で話し合いをするはずが、^①実力行使に出ているではないか。智子は手元に目を落としたまま、チキンライスを仕上げてゆく。

「おはようございます。あれこれ言うより、食べてもらったほうが早いと思って」

強引な女だ。けれどもフライパンを揺する手つきひとつ取ってもたしかな修業の跡が窺えて、胃袋が期待の声を上げてしまう。

タイル張りの厨房の床は水を流した後なのか濡れており、パンプスでは歩きづらい。それでもカウンターを挟んでのやりとりは、Aまだるっこしく、美由起は意を決して中に踏み込んだ。

「具はあえて、現状のレシピのままにしてみました」

ということは、鶏胸肉、タマネギのみじん切り、マッシュルームだ。仕上がったチキンライスを二枚の皿に盛り、智子は卵に手を伸ばす。

卵は一人につき二つ。泡立て器でしっかりと混ぜ、箸で濾してカラザを取り除く。そのひと手間に目を瞠り、文句を言っていた中園もひとまずは口を閉じた。

バターはたっぷり。フライパンに卵液を流し入れるとたちまちじゅわつと音を立てて膨らむ。智子の右手には菜箸が握られているものの、左手でフライパンを揺するだけで中身が流動し、かき混ぜられたようになってゆく。表面がつつや、ぷるぷるの半熟状態になったら、なんの苦もなくつりと移動し、卵がライス全体を覆い隠した。

その上から、小鍋で温めていたデミグラスソースをかける。市販品らしからぬ、深い黒褐色をして

(1-3)

いる。

「ソースは自宅で作ってきました」

ほどよく煮詰められたソースの芳醇な香りに、じゅるりと唾が湧いてくる。試食用として小さめに作ったようだが、正規のサイズで食べたいくらいだ。

「どうぞ、大食堂の新オムライスです」

「いや、『新』じゃねえし！」

悪態をつきつつも、中園が真つ先に皿をひたたく。悔し紛れに大口を開けてオムライスを頬張り、そのまま眉を寄せて黙ってしまった。

「美味しい！」

代わりに声を上げたのは、美由起である。半熟の卵とやや苦みのあるデミグラスソースが絶妙に絡み、舌の上でとろけてゆく。従来のレシピ通りだというライスは口に入れるとほろほろとほぐれ、かといつてバサついているわけでもない。

銀座あたりの、老舗洋食店でてきてもおかしくはない味だ。少なくとも、昔ながらの百貨店の大食堂で食べられるクオリティではない。

「でしょう」

微笑む智子は満足げだ。はじめてこの人の、皮肉っぽくない笑顔を見た気がする。

「待て待て、なんだよ自家製デミグラスって！」

^②図らずも沈黙で感想を伝えてしまった中園が、我に返って噛みついた。

「うちのオムライスは六百八十円。完全に足が出るだろう！」

「そのぶんはもちろん、価格に反映させます」

「は、値上げするってこと？　いくら」

「千二百円くらいが妥当かと」

「高えよ！」

マルヨシ百貨店の大食堂は、ポリウムたっぷりでお手頃価格。そのコンセプトでずっとやってきた。そこまでの値上げはさすがに、常連客の足が遠のく理由になる。

「でもそのぶん、美味しいものが食べられるんだから」

「いやいや、高くて旨いものが食べたい客は、大食堂には来ねえの。ここは、^{*}チープな旨さを求める奴らが来るところなの！」

(1-4)

「だけど私は、若社長に――」

「そんなに好き勝手やりてえんなら、自分で身銭切って店出せや！」

中園に凄まれて、智子が始めて言葉に詰まった。そこにえぐられたくない傷でもあったのか、唇を噛み、眉を寄せる。③ほんの瞬間の表情だったが、中園を狼狽えさせるには充分だった。

「えっと。マネージャー、なんか言ってます！」

苦しいときの、マネージャー頼み。中園こそ、今にも泣きだしそうな顔になっている。

美由起はすっかり空になった皿にスプーンを置き、口元を指で拭いた。

「ごちそうさます。本当に美味しかった」

「いや、完食してるじゃないですか！」

智子の経歴は、伊達ではない。料理の腕はたしかだと、このひと皿でよく分かった。

それでもひと晩考えて、自分なりに軸を定めてきたのだ。なにを食べさせられても、ぶれるつもりはない。

「ですがお値段据え置き、ラッピングタイプのケチャップソース。うちのオムライスは、それでいきます」

もしも智子が本当に若社長から食堂の全権を預けられているのなら、刃向かわないのが利口なのかもしれない。食堂部門で再出発どころか、今度こそ降格処分になることもあり得る。

それでもこのひと月、美由起なりに大食堂のことを考えてきたのだ。黙って引き下がるわけにはいかない。大食堂の存続が危ぶまれているなら、なおのことだ。

「うちの売りはあくまでも、『昭和レトロ』ですから」

④「あなたまだ、そんなことを」

自信満々に宣言した美由起に、智子が軽蔑の眼差しを向けてくる。いいかげんにしてちょうだいとその目が物語っている。

「分かります。前場さんは『古臭い』のが嫌なんですよ。ですからここに、『昭和レトロ』の定義を打ち立てます。一つ、昭和らしいもの」

美由起はそう言って、右手の人差し指を立てた。

「二つ、*ノスタルジーを感じるもの」

続いて中指。

「三つ目」最後に薬指を立て、問答無用に言い放つ。

(1-5)

「可愛いもの！」

三本指を突きつけられて、智子と中園が揃って腑抜けた顔になる。気持ちには分かるが、美由起は正気だ。

「可愛い？」と呟いてから、智子が額を押さえて首を振る。

「言っていることが、分からないわ」

「私ではなく、小五の娘の意見です。ラッピングタイプのオムライスは『可愛い』そうです」

「ああ、うん。俺、なんか分かるかも」

驚いたことに、小五女子の感性に寄り添ってきたのは中園だった。

「たしかに可愛いすよね。お腹のところがぼこんとして、そこにちょうど毛布を掛けるみたいに赤いケチャップが載って。絵心なくても黄色と赤のマジックさえあれば描けちゃう感じ、最高に可愛いっす」

しかも適当に話を合わせている様子ではない。奥二重の鋭い目で、真剣にオムライスの魅力を語っている。

中園ほどオムライスの「可愛さ」を理解できている気がしないが、美由起は「そうなのよ！」と尻馬に乗った。

「しかもラッピングオムライスって、素人が作ってもそんなに可愛くならないの」

「そうっすね。ころんとした形が作れない」

「だから家庭でも、カバータイプが主流になってるんだって」

「へえ、時代だなあ」

⑤「茶番はこのくらいで充分だ。美由起は表情をあらためて、智子に向き直る。

「ですから前場さん、ケチャップソースの、最高に美味しいラッピングオムライスを作ってくれませんか？」

智子の料理人としての腕と、できるかぎり美味しいものを提供したいという熱意は買う。あとはこちらのコンセプトにうまくはまりさえすれば、反目せずにやっていけるのではないだろうか。そんな期待を込めて、返事を待った。

「どうして、私が」

「まさか、作れないわけじゃないでしょう？」

「いや、無理なんじゃないすか。ラッピングのほうが技術がいりますもん」

(1-6)

中園にまで煽られて、智子は首まで赤くなった。折り返している厨房服の袖をさらにまくり上げ、卵を二つ片手に掴む。

「いい？今のうちに『すみませんでした』と謝る準備をしておきなさい！」

なんだか格好いい。智子はもう、プロの眼差しで卵をかき混ぜはじめている。

⑥ 込み上げてくる笑いを噛み殺しながら、美由起はこの人のこと、そんなに嫌いじゃないかもしれないな
いと思ひ直していた。

プロの料理人というのは、作る姿も鑑賞に値する。

たとえば舞いの名手のように、無駄な動作が一切ない。菜肴も使わずフライパンの上で卵がかき混ぜられてゆく様をもう一度目の当たりにして、美由起は感嘆のため息をつく。

ここまでの手順は、さっきと同じだ。さて問題は、この後である。

智子はまだ半熟すぎるのではないかと思われる段階でフライパンを揺するのをやめ、残っていたチキンライスを卵の向こう側半分に載せた。

あとは神業だ。フライパンの底を五徳に軽く打ちつけてから、握った拳で柄をトントンと叩いて卵を巻いてゆく。まるでオムライスがひとりで躍って形をなしてゆくみたいだ。思わず「おおお！」と称賛の声が洩れる。

「お皿！」

「あ、はい！」

短く指示が飛び、慌てて皿を差し出した。フライパンからオムライスが飛び出し、その上にボンと載る。

「うわあ！」

なんて綺麗なオムライス。大食堂のショーケースに貼りついてメニューを選んでいた、子供時代のと
きめきが蘇る。

智子はあつという間にもう一つを作り上げると、「このくらいいいでしょう」と言つてフライパンに赤ワインを注いだ。それを火にかけてアルコールを飛ばし、ケチャップを入れて延ばしてゆく。

従来よりも赤みの深いソースがぱつと張ったオムライスのお腹にかけられて、ますます食欲をそそる色味になった。

「どう。特別なものは使っていないわよ」

見ていたから知っている。まるで魔法のようだった。

中園もまた、焼きムラのないきめ細かな卵の表面に見入っている。レシピの変更は、ソースに入った赤ワインくらいのもの。それなのに、いつものオムライスとは見た目から違っていた。

「いただきます」

スプーンを入れるのももったいないが、食べてみないとはじまらない。覚悟を決めてひと口分を崩し、
頬張ってから美由起は目を見開いた。

「んー！」

もはや言葉にならない。

個人的な好みとしては、カバータイプに軍配が上がると思っていた。でももしかしたら、本当に美味しいラッピングオムライスを食べたことがなかっただけなのかもしれない。

「美味しい！こちらのほうがケチャップライスに半熟の卵がとろとろ絡んで、一体感がありますね」

カバータイプの場合、ライスと接するのはフライパンで焼かれた面だ。その点ラッピングだと、半熟の側でライスを包む。半熟卵と米の親和性の高さは、もはや言うまでもない。オムライスが米料理であることを考えると、
⑦ こちらのほうが正しい形のように思えてくる。

「これのどこに古臭さがあるっていうんですか。レトロな見た目を残しつつ、現代人の舌も唸らせる。最高のオムライスですよ！」

なによりお値段も据え置きにできる。美由起はすっかり興奮し、二つ目にもかかわらずべろりと平らげてしまった。

「そうまで言ってもらえると、料理人冥利につきるわね」

智子もまた、美由起の惜しめない賛辞に気をよくしている。ならばもうひと押しだ。

「これをオムライスリニューアル！と謳って売り出しましょう。同じラッピングタイプでもこんなに違うなら、お客様にとっても新鮮な驚きがあるはずです」

もしかして、智子にならできるんじゃないだろうか。輝きを忘れたこの大食堂に、魔法をかけ直すことが。ただの懐古趣味に終わらない、幅広い世代から愛される店にしていけば、きっと売り上げもついてくる。

「そうかもね。べつに私も、カバータイプに特別な思い入れがあるわけではないし」

よし、B言質は取った。この大食堂を、どここのデパートにでもあるテナントになど渡すものか。

仕事にやり甲斐を覚えるのは久しぶりだ。この、指の先にまでどくどくと血が通っている感覚。視界

までがクリアで、多少無理をしても疲れる気がしない。そうだ自分は元々、百貨店の仕事が好きだったのだ。

考えていたことが予想以上にうまくいって、美由起は舞い上がっていたのだろう。皿の上にスプーンが放り出されるカランという音に、はっと現実を引き戻された。

空になった皿を手に、中園が神妙な面持ちで立ちつくしている。

しまった、はしやぎすぎた。中園にだって、料理人としてのプライドがあるはずなのに。長年にわたる食堂を支え続けてくれた相手に対して、あんまりな仕打ちである。

かといって、「ごめん」と謝るのもおかしなことになりそう。美由起は気まずさを押し隠しつつ、中園の言葉を待った。

「めちやくちゃ、旨かった」

悔しさの滲んだ声だった。それでも中園は、負けを認めた。

「これに比べりや俺のオムライスなんて、卵に火が通りすぎてて米と全然馴染んでねえ。同じ材料でこんなもん作られたら、これからどうすりゃいいんすか」

いつもはよくも悪くも騒がしいのに、驚くほど覇気がない。料理人としてのプライドどころか、心までへし折られている。

「中学んとき鬼怖え先輩にシメられて、まぶた縫い合わされそうになったとき以来の絶望っす」

物騒な過去の記憶まで垂れ流しにして、中園はゆっくりとした動作で皿をシンクに置いた。まるで引退をする歌手が、マイクをステージにそっと置くかのように。

「は、アンタなに言ってるのよ」

傷心の中園にも、智子は容赦がない。鼻先でハッと笑い、手近にあった木べらを突きつけた。

「これからどうすりゃって、決まってるでしょ。一刻も早く、さっきのオムライスを作れるようになりなさいよ」

もっと、こてんぱんに言い負かすつもりなのかと思った。中園も、目と口をまん丸にして智子を見つめ返している。

「なによ、その顔。アンタ副料理長でしょう。私以外に誰も作れないんじゃないの」

「あれを俺も、作れるようになるんすか」

「あたりまえでしょう。作れるまで朝晩特訓するから」

「——姐さん」

(1-9)

「やめて。気持ち悪い呼びかたしないで」

美由起は強張っていた肩をほっと緩めた。最悪の場合、⑧へそを曲げた中園が食堂を辞めると言い出すのではと危ぶんでいた。

悔しくてたまらないのに負けを認めることができるのは、これから伸びてゆく人間の大事な資質だ。中園ならば、智子の技術を自分のものにしようと、必死に食らいついてゆくに違いなかった。

——坂井希久子『たそがれ食堂』による

(問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた)

(注) *1 チープな……価格が手頃である。

*2 ノスタルジー……懐かしさ。

*3 五徳……ガスレンジの上に設置し、フライパンを置くための器具。

*4 懐古趣味……古いものを好むこと。レトロ。

(1-10)

問一 ―――線部A「まだるっこしく」、B「言質」について、これらの言葉を本文中と同じ意味で

使っている文として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「まだるっこしく」

ア 人気のない夜の暗がりの雰囲気はまだるっこしく、勇気を振り絞って一歩踏み出した。

イ 笑顔を浮かべている赤ちゃんの様子はまだるっこしく、皆が目を細めた。

ウ 早口な二人の会話はまだるっこしく、おっとりとした自分にはまったくついていけない。

エ 幼なじみとの関係性はともまだるっこしく、いつまでも続いていくものだ。

オ 翻訳ソフトを使って商談を進めるのはまだるっこしく、拙い英語で話し始めてしまった。

B「言質」

ア これだけ点差がついたのだから、この試合はもう言質を取ったも同然だ。

イ 宿題をやっていないという言質を取られないように、こっそりと遊びに出かけた。

ウ 協力するという言質を取った以上は、最後まで付き合ってもらおう。

エ 彼は言質を取ることを生きがいに行っているので、山奥でひっそりと暮らしている。

オ 強豪校は言質を取ることが求められているので、その分練習は厳しい。

(1-11)

問二 ―――線部①に「実力行使に出ているではないか」とありますが、これはどういうことですか。

その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 智子が美味しいオムライスを目の前で作ってみせることで、料理人は話し合うよりまずは手を動かして料理を作ることが大事だと中園に教えようとしているということ。

イ 中園と智子がそれぞれにオムライスを作って美由起に試食させることで、どちらが料理長にふさわしいか、美由起に公平に判断させようとしているということ。

ウ オムライスを智子のレシピに沿って作ってみることで、本当にその味わいが現状のものよりも勝っているのかどうか、美由起と一緒に試してみようとしているということ。

エ 料理人としての腕を振るったオムライスの試作品を食べさせることで、料理長となった智子が自分の意見を中園や美由起に聞き入れさせようとしているということ。

オ 中園の反対を押し切っても厨房に入り、実際に調理をすることで、智子が自分にもオムライスぐらい作れるということを証明しようとしているということ。

問三 ―――線部②に「図らずも沈黙で感想を伝えてしまった」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 中園は智子の作ったオムライスを試食して何か一言言つてやろうと思っていたが、あまりの出来に言葉を失ってしまい、結果として智子の腕前を認めたことを示してしまったということ。

イ 中園は智子の強引なやり方に怒り心頭に発していたが、そのオムライスの美味しさに自分の負けを認めざるを得なくなり、悔しさのあまり何も言えなくなってしまったということ。

ウ 中園はこれまで食堂に関わりがなかった智子のことなど信用できるはずもなく、料理長だからといって、どんな料理を出されても何も言うつもりはないと意思表示をしたということ。

エ 中園は智子のオムライスの見た目と匂いに圧倒され、潔く負けを認めようと思っていたが、試食したデミグラスソースの味に違和感をおぼえ、すぐには美味しいと言えなかったということ。

オ 中園は智子の作ったオムライスのあまりの美味しさに圧倒されていたが、直接それを言葉で伝えるよりは、あえて沈黙することなどでなんとか自分の威厳を保とうとしていたということ。

(1-12)

問四 ー線部③に「ほんの一瞬^{いつしゆん}の表情だったが、中園を狼狽^{うろうた}えさせるには充分^{じゆうぶん}だった」とありま
すが、このときの中園の心情を四十字以内で説明しなさい。

【下書き欄】らん
—— 必要ならば使いなさい。

A blank coordinate grid for plotting. It features a vertical dashed line and horizontal dashed lines. The x-axis is labeled with 40 on the left and 20 on the right.

問五 ――線部④に「あなたまだ、そんなことを」とありますが、このときの智子の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　頭の固い中園はともかく、美由起なら賛成してくれると信じていたのに裏切られ、大食堂を支配する「昭和レトロ」という固定観念の前に、名状しがたい無力感を抱いだいている。

イ 安くても古くさい現在の食堂のメニューでは早晚客足が遠のくと直感しており、「昭和レトロ」を譲ろうとしない美由起の考え方をいかに変えていくかを冷静に考えている。

ウ　大食堂の旧態依然としたやり方に対して違和感を持っており、「昭和レトロ」にこだわる美きめづたいていせん由起の発想では大食堂を変えることはできないとうんざりしている。

工 今のままではこの大食堂を続けていくことができなくなるのに、会社の方針に盲従して「昭和レトロ」のオムライスに固執する美由起の発言にあきれた気持ちになっている。

オ 新しいオムライスの美味しさに絶対的自信を持っており、その味を認めずになお「昭和レトロ」の方が良いと言い張る美由起に対して、そのあきらめの悪さを見下している。

問六 ― 線部⑤に「茶番」とありますが、ここではどういうものですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　智子に「昭和レトロ」なオムライスを美味しく作ってもらいたい美由起が、自分の子供と考ええ方の共通する中園の口を借りて、「昭和レトロ」の魅力みりよくを語らせるやりとり。

イ 美由起が智子に「昭和レトロ」なオムライスを作らせたいと思うがゆえに、昭和生まれの中園の実感をしゃべらせることで、その時代の良さを共有するやりとり。

ウ　新しさと美味しさにこだわる智子を説得するために、打ち合わせ通りに中園と漫才のような会話を^か交^わし、場の雰囲気^かを悪くしない形で「可^か愛^わらしい」の魅力^かを主張するやりとり。

工 美由起が智子に「可愛らしい」とはどういうことを理解してもらうために、およそ「可愛らしい」とは縁えんのなさそうな中園と子供じみた会話を続けるやりとり。

才 智子に「可愛らしい」という自分の方向性を受け入れさせたい美由起が、意外な反応を見せた

(1-13)

(1-14)

問七 ―― 線部⑥に「込み上げてくる笑いを噛み殺しながら、美由起はこの人のこと、そんなに嫌いじゃないかもしれないと思ひ直していた」とありますが、ここでの美由起の心情の変化について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 料理人としての腕前に絶大な自信を持つ智子に自分の考えを受け入れさせる困難さを感じてい
たが、自尊心を刺激しげきすることであつあつか扱いやすくなると知り、これならうまく利用することができそ
うだと思ふようになってゐる。

イ 高い技術を背景に我を押し通そうとする智子に仕事仲間としてのやりにくさを感じていたが、ちよつとした挑発ちやうはつにも本氣になつてしまふところに親しみを感じ、これから一緒にやつていけるのではないかと思うようになってゐる。

ウ　高飛車な物言いをする智子にとつつきにくさを覚えていたが、料理人としての圧倒的な技量とすぐに感情的になつてしまふ人間らしさに魅力を感じ、自分のやりたいことを実現させるためにも智子についていくのがよいのかもしれないと思うようになってゐる。

工 正確な技術で美味しい料理を作り、正論を口にする智子に近寄りがたいものを感じていたが、頼まれれば嫌とは言えない義理堅さも持つていることを知り、もつとその人となりを知つてみたいと思ふようになってゐる。

オ　話し合うこともせず、自分の意見を通そうとする智子の強引さに辟易へきえきしていたが、口では荒あらつ
ぽいことを言いながらも美由起や中園の真意を汲くみ取つて協力してくれる優やさしさを感じ、今まで
の言動は強がりだったのかもしれないと思うようになってゐる。

(1-15)

問八——線部⑦に「こちらのほうが正しい形のように思えてくる」とありますが、それはどうしてですか。三十字以内で説明しなさい。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

問九 ――線部⑧に「へそを曲げた中園が食堂を辞めると言いだす」とありますが、美由起はどうして「へそを曲げた中園が食堂を辞めると言いだす」かもしれないと思ったのですか。八十字以内で説明しなさい。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

(1 - 16)

四、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本語学・日本語教育学者の庵功雄さんが著した『やさしい日本語』は、簡略化された（やさしい日本語）の概要を示しつつ、社会におけるその重要性を指摘しており、目下の論点にとって非常に参考になる著書だ。

そこで提唱されている（やさしい日本語）とは、簡単にまとめるならば、（１）語彙を絞る、（２）文型を集約するなどして文法を制限する、（３）難しい表現を噛み砕く、といった方法により、特定の障害のある人や在日外国人などにとっても習得や理解がしやすいように調整された日本語のことだ。

この〈やさしい日本語〉は、災害時における行政やメディアによる広範な情報発信という用途のほか、平時においても、多様な人々が暮らす日本の地域社会の共通言語として用いることによって、^{*}社会的包摂や多文化共生につながることを目指されている。具体的には、たとえば、

「地震直後に必要になる水や保存食はもちろんのこと、給水車から給水を受けるためのポリタンク等も事前に購入しておきたい」

という日本語ネイティブ向けの防災の呼びかけは、

「地震のすぐあとのための水や食べ物とはとても大事です。水をもらうときのためのポリタンク（水を入れるもの）も買ってください」

といった文章に言い換えることが推奨される（『やさしい日本語』一八七―一八八頁）。

同書中で紹介されているエピソードのなかで特に印象深いのは、聴覚に障害のある一人の男性のエピソードだ。彼はろう学校で必死に日本語を学んだが、彼の母語である日本手話が日本語と大きく文法体系が異なることなどもあり、敬語の使い分けや助詞の使い方などはうまく習得できなかった。就職後、彼が「てにをは」の不自然な文――たとえば、〈仕事が終わらせる〉など――を書いたりすると、周囲の同僚にからかわれたり、蔑まれたりするようになり、相当の辛苦を味わったという（同書一三八―一三九頁）。同様のつらい思いは、日本で働く在日外国人なども少なからず経験していることだろう。

日本語を母語とする者が高度に使いこなしているものを皆が従うべき「規範」として立て、そこから逸脱した使用を嘲ったり厳しく注意したりするのでは、社会的包摂や多文化共生からは遠ざかるばかりだろう。むしろ、「日本で安心して生活するために最低限必要な日本語」（同書八六頁）を基準に皆が日本語の学習やコミュニケーションのあり方を考えていくことは、特定の障害のある人や在日外国人などが「日本の中に自らの「居場所」を作る」（同書七三頁）ことにつながるだろう。

（ 1-17 ）

以上の指摘は非常に重要だ。〈やさしい日本語〉を知恵を絞って構築し、日本語教育の現場などに普及させて日本語習得のハードルを下げることは、たとえば移民など、この国の地域社会で生きていく必要のある人々にとっても、また、彼らと共生していく日本語ネイティブの住民にとっても有益であることは間違いない。

さらに、同書では、〈やさしい日本語〉はそのほかの点でも日本語ネイティブ自身にとって大いに恩恵があると指摘されている。私も含め、日本語ネイティブはしばしば、「適当に言っても通じる」という^①ある種の「甘え」（同書一八四頁）のなかにいる。たとえば、企業でも官庁でも大学等々でも、自分でもよく分かっている曖昧な業界用語を、符丁のように用いて、仲間内でうなずき合って過ごす、というのはよく見られる光景だ。また、無駄に難しい言葉をこねくり回して立派な話をするように見せかける、というケースもしばしばあるだろう。

そうした甘えや幻惑から脱して、自分とは異なる背景を有する相手の立場に立ち、物事を分かりやすく表現して伝えようとすることは、多くの場面でコミュニケーションの成功の機会を増やしてくれるほか、物事のより明確な理解や、より多角的な理解を促進してくれるだろう。

ただし、「やさしい日本語」が日本語それ自体の規範になってはならない。私はこの一点に関してのみ、〈やさしい日本語〉の推進に対して A 一抹の懸念を抱いている。

たとえば同書では、日本語ネイティブにとっては拙く思えるような日本語も一種の「方言」ないし日本語のバリエーションであって、たとえば在日外国人がそうした日本語で「大学のレポートや会社のビジネス文書を書いても受容すべきだ」（同書二〇七頁）と言われている。もしもこの主張が、あらゆるレポートやビジネス文書についての規範的主張として展開されているのだとしたら、それには明確に反対したい。

大学教員としての私自身の経験でいえば、たとえば授業に出ている留学生と話し、その人の母語が日本語ではないと了解した場合には、その学生が日本語で書いたレポートについては、基本的に表現の部分に関する配慮を行っている。誤字脱字が多かったり、「てにをは」がおかしい箇所があったり、単語の選択に疑問があつたりする場合でも、おおよそ目を瞑っている。そして、内容の方を重視して精査している。他方で、日本語ネイティブの学生については、そうした表現上のおかしさは減点の対象にしている。

（ 1-18 ）

② 私は、これが不公平な処置だとは思わない（ネイティブと非ネイティブの境界線が曖昧であるなど、微妙なケースは存在するけれども）。レポートの提出や採点といった一連の過程は、^{＊3} 単位認定などのための評価の場であると同時に、教育の場でもある。それゆえ、採点の基準も、個々の学生の力を伸ばす方向で考えるべきであって、機械が採点するのではないのだから、画一的な基準で片づけるべきではない。ケースバイケースで、教員がそのつど頭を悩ませながら考えるべき事柄だろう。

たとえば私は、非日本語ネイティブの留学生が日本の大学院への入学を志望しており、将来的に日本語で論文を書く意志がある場合には、誤字脱字や「てにをは」の乱れなどの表現上おかしい部分について、学生の希望や習熟度に応じて指摘するようにしている。というのも、「てにをは」は必ずしも些細なものではなく、誤読を引き起こさない正確な文章を書く際に、しばしば非常に重要なポイントになるからだ。

ビジネス文書に関しても、同様にケースバイケースと言えるだろう。「てにをは」や単語の選択などが重要なケースもあれば、そうでないケースもある。当該の文書がどのような目的で書かれ、どのような場で読まれるか等々によって、日本語ネイティブがそれを受容すべきかどうかは当然変わってくるのである。

また、たとえば③ 専門家の繰り出す表現がときに難しいものになるのは、難しい言葉を無駄にこねくり回しているから——本当は分かりやすく言えるのに、敢えて好きこのんで難しい言葉を用いているから——というケースも確かにあるが、そればかりではない。

医学であれ、工学であれ、法学等々であれ、専門家が扱う問題は、まさにその道の専門家が必要であるほどに、そもそも難しい。複雑な問題があるがままに正確に捉え、解決の方途を正確に言い表そうとするならば、その表現はおのずと複雑で、繊細なものになっていく。

もっとも、専門家は常に難しい言葉の使用に終始していればよいというわけではない。専門家と市民との十分なコミュニケーションは本当に重要であり、そこでは難しい言葉はしっかりと噛み砕かれるべきだ。ただし、その前にまずもって、専門の領域において突き詰めた思考と表現が必要なのだ。

また、種々の社会問題の込み入った中身に分け入ったり、人間の心理の微妙な変を分析したり、古来受け継がれてきた世界観や価値観の内実を B 浮き彫りにしたり、といった場合にも、慎重に繊細に言葉を練り上げることが必要となる。そうやって腐心することではじめて表現できることがあり、その表現によって始めて見えてくるものがあるのだ。そして、そのような実践が可能であるためには、言語

という巨大な文化遺産の奥深くにアクセスし、その膨大な蓄積を利用しつつ、変更を加えたり新たなものを付け加えたりしていく道が、私たちに確保されていなければならない。つまり、（やさしい日本語）ではなく、^{＊4} 前掲書で言うところの「精密コードとしての日本語」（同書二〇九頁）を用いることが、そこでは可能でなければならない。

しかもそれは、各分野の専門家や、あるいは作家といった職業の人に可能であればよい、というものではない。（精密コードとしての日本語）の使用が私たちのうちのごく一部に限られてしまえば、そこに大きな知的格差や、あるいは権威・権力の偏りが生まれ、日本語は非民主化されてしまうことになる。また、そもそも、過去の言葉の蓄積を理解できる人が少なくなれば、その分だけ遺産自体が先細り、朽ちていってしまうことになる。

要するに、言葉は常に伝達のための手段であるわけではなく、しばしば、④ 言葉のまとまりをかたちづくること——表現を得ること——それ自体が目的となる場合がある、ということだ。その点で、「日本語母語話者にとって最も重要な日本語能力は、「自分の考えを相手に伝えて、相手を説得する」ということである」（同書一八一頁）という、同書で繰り返されている主張は、言葉の働きの一方を強調し過ぎていように思われる。もちろん、その種のコミュニケーションスキルも、きわめて重要だ。しかし、これがほかの何よりも重要であるというわけではない。すなわち、その伝えるべき「自分の考え」それ自体を生み出すことも、同じくらい重要な言葉の働きなのである。

それから、言語の簡素化と平明化を推進することが、必ずしも言語の⑤ 民主化につながるとは限らない、という点も強調しておくべきだろう。

多様な人々の間で用いられる共通言語を意図してつくろうとする際には、一般的に、語彙と文法を制限して学習や運用のコストを減らすという方法がとられる。しかし、人工的な共通言語のこうした特徴は、たとえばジョージ・オーウェル（一九〇三—一九五〇）の小説『1984』に登場する、^{＊5} 全体主義国家の公用語「ニュースピーク」の特徴と似通っている。

^{＊6} 本書第一章でいくつか具体的な事例を通して確認したように、多くの言葉は、物事に対する特定の見方、世界観、価値観といったものを含んでいる。（たとえば、「土足で踏み込む」、「かわいい」、「しあわせ」など。）言葉は思考を運ぶ単なる乗り物物ではなく、ある種、「思考が言語に依存している」（『1984』四六〇頁）とも言えるのである。そして、^{＊7} 件の全体主義国家は、言語のこの特徴を最大限に利用している。すなわち、旧来の英語を⑥ 改良した「ニュースピーク」なる新しい言語を発

明し、その使用を強制することによって、国民の表現力や思考力を弱め、全体主義に適う物事の見方に嵌め込むのである。

ニュースピークの具体的な設計思想は、文法を極力シンプルで規則的なものにする事、そして、体制の維持や強化にとつて不要な語彙を削減し続けることである。小説の登場人物の口からは、「年々ボキャブラリーが減少し続けている言語は世界でニュースピークだけだ」(同書八二頁)とも語られている。たとえば、「good (良い)」という言葉の程度を強めるのに「excellent (素晴らしい)」とか「splendid (見事)」といった言葉があるのは無駄であつて、「plusgood (+良い)」とか「doubleplusgood (++良い)」という言葉で十分とされる(同書八一頁)。作者のオーウェルは、小説の付録として「ニュースピークの諸原理」を詳細に著しているが、そこで彼は次のようにも綴っている。

我々の言語と比較してニュースピークの語彙は実に少なく、さらに削減するための新たな方法がひっきりなしに考案され続けた。ニュースピークは他の言語と異なり、年々語彙が増えるのではなく、減少し続けたのである。選択範囲が狭まれば狭まるほど人を熟考へ誘う力も弱まるのだから、語彙の減少はすなわち⑦利益であつた。(同書四七三―四七四頁 ※原文を基に一部改訳)

しつくりくる言葉を探し、類似した言葉の間で迷いつつ選び取ることは、それ自体が、思考というものの重要な要素を成している。逆に言えば、語彙が減少し、選択できる言葉の範囲が狭まれば、その分だけ「人を熟考へ誘う力も弱まる」ことになり、限られた語彙のうちに示される限られた世界観や価値観へと人々は流れやすくなる。ニュースピークとはまさに、その事態を意図した言語なのである。

語彙と文法の制限によつて簡素化・平明化を実現したニュースピークは、淀みのない滑らかなコミュニケーションを人々に可能にさせるが、しかしその事態は、人々がこの言語によつて飼ひ慣らされ、表現力・思考力が弱まり、画一的なものの方や考え方に支配されることを意味していた。

もちろん、これは小説のなかの話であり、ある種の思考実験に過ぎない。(とはいえオーウェルは、二〇世紀前半に猛威を振るつた現実の全体主義国家の言語政策や*プロパガンダなどを手掛かりに、ニュースピークを周到に構想したわけだが。)

また、〈やさしい日本語〉はニュースピークのようなものだ、と言いたいわけでもない。ニュース

(1-21)

ピークは、全体主義に適わない世界観や価値観を表現する言葉を積極的に廃止し、「ありとあらゆる他の思考様式を完全に排除すること」(同書四六〇頁)を明確に意図して設計されている。その一方で〈やさしい日本語〉は、先に確認したように、地域に住む人々の多様な背景を尊重し、相手の立場に立つたコミュニケーションを推進することを目的としている。それゆえ、人々は〈やさしい日本語〉の使用によつて、画一的なものの方どころか、多角的なものの方を見方を獲得できる可能性が大にあるだろう。

しかし、仮に〈やさしい日本語〉が全面化するとすれば――つまり、いかなる場面でも〈やさしい日本語〉の使用が推奨されたり要求されたりするとすれば――その際にはこの言語はニュースピーク的なものに近づくことになる。誰か(言語学者? 国の機関?)が意図して減らした語彙と表現形式に従つたかたちであらゆる報道がなされたり、あらゆるレポートや論文が書かれたりするようになれば、どのような語彙や表現形式が制限されるかに応じて、思想的な偏りが生まれたり強まったりするだろう。また、たとえば価値中立的な言葉や政治的に中立的な言葉だけをを用いる、といった方針を採つたとしても、言うまでもなくその方針自体が、一種の思想的な偏りを示すものとなる。

そして、それ以前に、〈精密コード〉としての側面を失つた日本語は、それを使用する者の表現力や思考力を著しく弱めてしまうことだろう。

—— 古田徹也『いつもの言葉を哲学する』による

(問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた)

- (注)
- * 1 社会的包摂……すべての人を社会の一員として取り込むこと。
 - * 2 符丁……仲間内だけで通用する特殊な言葉。
 - * 3 単位認定……大学などで授業の内容を習得したと認めること。
 - * 4 前掲書……庵功雄の『やさしい日本語』のこと。
 - * 5 全体主義国家……個人の自由や権利を認めず、全体の利害を優先する国家。
 - * 6 本書第一章で確認したように……筆者は本文より前の部分で言及している。
 - * 7 件の……「先ほど挙げた」という意味。
 - * 8 プロパガンダ……意図的に特定の考え方へと人々を誘導するもののこと。

(1-22)

問一

~~~~線部A「一抹の」、B「浮き彫り」について、これらの言葉を本文中と同じ意味で使っている文として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「一抹の」

ア 今日こそはうまくいくにちがいないと、一抹の望みをかけていた。  
イ 修学旅行が終わってひとりで帰宅していると、一抹の寂しさを感じた。  
ウ 彼はいつも一抹のことばかり気にして、全体を見ようとしなない。  
エ 一抹の問題として片付けてしまうには、あまりにも大きすぎる問題だ。  
オ 親に嘘がばれたらどうなるかと思うと、一抹の恐怖におののいた。

B「浮き彫り」

ア 見事な浮き彫りの熊が店頭に並んでいたので、つい買ってしまった。  
イ 隠れているつもりのようなだが、しつぽが出ているので犬がいるのは浮き彫りだった。  
ウ リトマス試験紙を使って、試験管の中身が酸性かアルカリ性を浮き彫りにした。  
エ 思いつきで始めた企画だったのでうまくいかず、計画性のなさが浮き彫りになった。  
オ 自分の将来を浮き彫りにするために、さまざまな人に意見を求めた。

( 1-23 )

問二

~~~~線部①に「ある種の『甘え』」とありますが、その例として最もふさわしいものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 道を歩いていて急に外国人に声をかけられたときに、あたかも英語を話しているかのような口調で日本語を話す。

イ 親にお小遣いの額を上げてほしいとき、いつもは使わないような敬語を使って説得しようとする。

ウ 入学したばかりの中学一年生も参加する試合に関する説明会において、部の中で日頃使っている略語で説明する。

エ 寝坊して遅刻してしまったとき、電車が遅れていたことにかこつけて先生に見逃してもらおうとする。

オ まだ言葉が伝わらない赤ちゃんに大人が話しかけると、擬音語や擬態語を多用してわかりやすく話す。

問三

~~~~線部②に「私は、これが不公平な処置だとは思わない」とありますが、筆者はなぜこのように考えているのですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア レポートの採点は教育の一環でもあり、レポートを提出した学生の進路や言語的な背景をもとに、それぞれの学生の能力をより良い形で伸ばすことを念頭に置いて行うべきだから。

イ ネイティブと非ネイティブでは日本語の習熟度に大きな差があるのは当然であり、その点を考慮して採点基準を変えることが結果的に公平な採点につながるから。

ウ レポートにおいて重要なのは表現ではないので、表現の誤りによる減点はせずに、学生の作り上げたレポートから読み取れる学生の将来性を見るべきだから。

エ レポートの採点はもともと主観的なものであり、レポートを提出した学生の環境に配慮すべきかどうかは、採点者である筆者の判断に委ねられるべきだから。

オ 学生の書いたレポートはそれまで触れてきた日本語の量に左右されるものであり、その経験から来る能力差を点数化することは教育上意味がないから。

( 1-24 )

問四 ——— 線部③に「専門家の繰り出す表現がときに難しいものになる」とありますが、それはどうしてですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 専門家は長年の経験に裏打ちされた豊かな語彙力を有しており、専門的な知識を持ち合わせていない一般人の語彙力では正確には理解しづらいこともあるから。

イ 難解な言葉の意味を追究することそのものが研究の対象となる場合もあるが、専門家である以上、誰にでもわかりやすい繊細な言葉遣いを心がけることは義務であるといえるから。

ウ 自分たちの研究に箔はくを付けるためにわざわざ難しい言葉を多用することもあるが、専門的で複雑な問題には難解な言葉の方が似つかわしいと世間でも理解が得られているから。

工 平易な言葉で説明できる問題を難しい言葉で表現している場合もあるが、複雑な問題の場合は、複雑な思考と、それを可能にする複雑な言葉を用いなければ正確に捉えられないから。

才 一般社会と切り離はなされた専門性の高い複雑な分野ばかりに関わっていると、必然的に日常生活で使われているような言葉での説明がしにくくなってしまふから。

問五——線部④に「言葉のまとまりをかたちづくる」とありますが、これはどういうことですか。

二十字以内で説明しなさい。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

問六 ——— 線部⑤「民主化」、————— 線部⑥「改良」でそれぞれ「、」が付けられている理由について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ⑤「民主化」は誤った使い方であることを表すために、⑥「改良」は皮肉のこもった表現にするために付けられている。

イ ⑤ 「民主化」は特殊な用法であることを表すために、⑥ 「改良」はよく使われる用法であることを表すために付けられている。

ウ ⑤「民主化」は実現に至らない可能性もあることを表すために、⑥「改良」は実は大して変わっていないことを表すために付けられている。

工 ⑤「民主化」は一般的な使い方ではないことを表すために、⑥「改良」は実態は異なるという主張を表すために付けられている。

オ ⑤「民主化」はその重要性を表すために、⑥「改良」は実際に行われたわけではないということを表すために付けられている。

問七 ― 線部⑦に「利益」とありますが、これは何にとつての、どのような利益ですか。三十字以内で説明しなさい。

[illegible]

問八 〓線部に「やさしい日本語」が日本語それ自体の規範きはんになつてはならない」とありますが、それはどうしてですか。八十字以内で説明しなさい。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

氏名

番

聖光学院中学校

二〇二三年度

第一回 入学試験 解答用紙 国語

【注意】解答はすべてこの解答用紙に記入すること。

得点合計

一、

|    |
|----|
| ①  |
| じる |
| ②  |
| ③  |
| ④  |
| ⑤  |

二、

|   |
|---|
| ① |
| ② |
| ③ |
| ④ |
| ⑤ |

三、

|    |
|----|
| 問一 |
| A  |
| B  |
| 問二 |
| 問三 |

問四

40 20

問五

問六

問七

問八

30

20

問九

80 60 40 20

四、

問一  
A

B

問二

問三

問四

問五

20

問六

問七

30

20

問八

80 60 40 20